HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Session5. 行動、分布、行動圏、狩猟
Author(s)	間野, 勉
Citation	新ひぐま通信 別冊 : 第7回国際クマ会議報告書, 10-11
Issue Date	1986-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91573
Type	report
File Information	session5.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第7回国際クマ会議報告書：10－11（1986）

SESSION V. Movement, Distribution, Homerange, Harvest
行動、分布、行動圏、狩猟

間　野　　勉

発表内訳は、アメリカクロクマのテレメと記号放逐による追跡結果が4編、個体群の現状と分布に関する報告がクロクマとメガネグマで各1編、狩猟データの分析がハイイログマ1編とクロクマ2編の、合計9編であった。このうち、グレイト・ディスマル・スワンプ国立野生生物保護区のクロクマの、興味ある冬眠生態については野外見学会の項で述べることにして、他の発表について報告したい。

テレメトリィを用いた研究は、広くアメリカ、カナダでは行なわれているが、今回のプログラムでは、個体による生息地の利用状況の解析を主眼としたものと、複数個体の行動追跡から、個体間関係や年齢別、性別の行動の比較など、クマの社会構造の分析を主眼とするものとに分けて発表され、前者は食性と生息地利用（Food Habits and Habitat Use）のSESSIONで発表された。

これまでの研究では、オスの行動域がメスに比べ広大で安定していないのに対し、メスの行動域は狭く、メス同士で排他的に確立する傾向があるとされている。そして、このことからメスでよりなわばり性が強いとされており、これは哺乳類一般に当てはまる。しかし今回の発表では、ノースカロライナ州とカナダのオンタリオ州のクロクマでは、メス同士の行動域が重複している（オンタリオの報告では61パーセントの成獣のメスに20パーセントから100パーセントの重複がみられた）ことが報告された。Beecham（1983）は、オスは、環境収容量よりはるかに低い密度で分散するのに対し、メスは飽和密度に達して分散がひきおこされるかもしれないと述べている。メスの密度や生息環境の違いによって、このことは変化するのかもしれない。地元のバージニア州からは、500頭以上のクロクマを記号放逐し、再捕獲地点との距離を検討することによって、性別、年齢別の行動を比較した報告がなされた。

メガネグマの分布の報告では、これまで知られていなかった小個体群が、ボリビア南部からアルゼンチンにかけて分布していることが発表された。この個体群は、生息地の森林の伐採と、農地放牧地の増大によって将来が危ぶまれており、またこれら開発の規制が困難なことから、保護対策の見通しはあまりたっていないという。開発によって分断孤立化が進んでいる、フロリダ半島部のアメリカクロクマの分布についての発表では、現在のクロクマの分布が農地開発や道路網の発達に伴う生息地の分断によって狭められたことを明らかにした上で、クロクマの生息地としての森林のサイズやそれらの移動経路確保のための連絡について考慮して、今後の土地利用を進めるべきであるとの提言がなされた。

狩猟の分析については、カナダのユーコン準州のハイイログマとアーカンソー州のアメリカクロクマについての発表があった。ともにサンプル数は二桁の水準であり、この点では日本はひけをとらないようである。ユーコンのハイイログマでは、これまで一般的にいわれているような、狩猟によってオスがメスより捕獲され易い傾向はなく、むしろオス・メス間の行動の相違は、よりメスが捕獲され易いほうに働くという。個体群中における各階層個体の狩猟による捕獲され易さ（Vulnerability）は、狩猟法や猟期の設定条件、猟区の地形や積雪状態などによって変化すると思われた。アーカンソーのクロクマでは僅かな捕獲個体群の齢構成から生命表を作成し、個体群が高い狩猟圧にさらされていると述べていた。ここではハンターに対するアンケート調査から、捕獲努力量の推移についても同時に調査しており、エゾヒグマの捕獲資料を用いる場合にも、厳密には捕獲努力量の指標を得ることが今後必要になるだろう。

Black Bear Conference Set

The Virginia Commission of Game and Inland Fisheries is co-sponsoring the Seventh International Conference on Bear Research and Management and the Eighth Eastern Black Bear Workshop this February in Williamsburg. These conferences will bring together biologists from all over the world who are conducting research on bears. The eastern conference will focus on the status, biology, and management of eastern black bear populations, and both conferences promise to increase our understanding of the species. □

VIRGINIA WILDLIFE (1986)より